CALLED BACK
― エミリ・ディキンスンの隠遁をめぐって，残した言葉を探る ―

鈴木 和子†

“Called Back”: Emily Dickinson’s Dying Words and Her Poems of Seclusion

Kazuko Suzuki

1. はじめに

ウォルト・ホイットマン（Walter Whitman）と並び，19世紀アメリカの２大詩人であるエミリ・ディキンスン（1830-86年）は，1800編もの詩を書きながら自ら公にしようとはせず，生前は無名詩人としての存在すらなかった。死後に発見された詩の原稿が，親族らによって詩集として出版され，高評価を得たものの手を加えられた編集がなされたことで固定化された詩人像がひとり歩きする。ピューリタニズムの家系に生まれ，未婚のひきこもり女は「アーマストの尼僧」というイメージを長い間引きずってきた。1955年，トーマス・H・ジョンスンが全詩集として全容を明らかにした。1998年にはラルフ・W・フランクリンが手筆原稿を精密に調べ，新たに発見された作品を追加して出版した[1]。女性批評家らの活躍や20世紀のアメリカ文学の正典運動によって，ディキンスンが評価されるやその存在は露わとなった。

今日まで研究者や批評家たちは，ジェンダー（フェミニズムと家父長制），政治（階層，ホイッグ党），宗教（ピューリタン），19世紀のアメリカの文化の諸相という関心から，この詩人を多角的な視点で論じてきた。しかしいまだに解明できていないファシクル（40冊ほどの小冊子）の存在は，研究者間の異なるアプローチにより，その重要性や内容の解釈に違いが生じている。それと相反する問いが，生前にディキンスンが作品を公にしなかったのはなぜかである。本論はこの問いに対し，19世紀アメリカの個人主義とアイデンティティーに着目しつつ，詩のテクストや書簡を通して一考察するものである。詩人が最期に残した言葉“Called back”が意味するのは，残されたファシクルの存在に直結すると，論者は考える。本研究を通し，人間にとっての自己表現とは何かを問い直したい。

2. 詩の量産と隠遁生活

2.1 時代と詩人

どの時代に生を受けても，私たちは世の中の動きに少なからず影響されたり翻弄されたりする。稀に特別な時代を生きた者がいたとしよう。ベンジャミン・フランクリンのように歴史に名を刻んだ人物は，未来永劫に亘って記憶に残る。しかしその時代の影となる部分に目を向けてみれば，新たな歴史観が生まれ視野が広がる。そのような意味で19世紀に誕生した詩人エミリ・ディキンスンは，ジェンダー論やアイデンティティーに関して今なお多大な影響力を持ち得ている。

I’m Nobody! Who are you?
Are you - Nobody - too?
Then there’s a pair of us !
Dont tell! they’d advertise - you know!

How dreary - to be - Somebody!
How public - like a Frog-
To tell one’s name - the livelong June-
To an admiring Bog! （Fr260, 1861）[2]

わたしはこの世で誰でもない！あなたは？／あなたも－また－誰でもない人なのね／それじゃ，わたしたちは一緒ってことね！／それは言っちゃだめよ。彼らは宣伝するわよ。－いいこと！／／ああ，なんて気がめいる－誰かでいるなんて！／なんて騒がしい－蛙みたいに／聞き入れてくれる沼地に向かって－6月中／自分の名前を言い続けるなんてこと！

これは，1861年に詩作したディキンスンの最も有名な詩の1つである。信仰告白を断念し学校を中途退学してか

†2023年度修了（人文学プログラム）

ら，屋敷からはほとんど出ず詩作に夢中だった。彼女が最も詩を量産した時期は，1861年から65年までの南北戦争中に集中している[3]。アレン・テイト（Allen Tate, 1899-1978）は，ニュー・イングランドの思想として，この時代の歴史的背景の重要性を説いている。神権政治が衰退し産業革命後の工業・商業化による産業思想が台頭しようとしていた変化のなかで，ピューリタニズムから生まれた文学的な思想には「広大な測りがたい価値」があり，その理由を「人間の魂を劇化することができた」からだと述べている[4]。ディキンスンが生まれた1830年は超絶主義が起こり，デモクラシー文化と重なり，アメリカの産業革命によって従来の社会的な秩序観や思想が激しくぶつかりあう時代であった。

2.2 女性のイデオロギー

ディキンスンは，20代後半から徐々に隠遁生活に向かった。内向的な性格あるいは健康面などいくつか考えられているが，本当の理由は不明である。しかし，19世紀中葉の女性観の視点が理解の助けとなる。ニーナ・ベイム（Nina Baym）が指摘するのは，この時代の女性の生活の多様性である[5]。ベイムは，当時のアメリカにおける結婚が多くの場合には経済的なものであったことを述べている。都市化や産業化，移民の流れの大きな変化が新共和国への求心力を増していき，その結果多様性に富んだ女性の生活と階級意識の強い社会構造が生まれた。また当時の社会では，いくつかの女性のイデオロギーが存在していた。ドメスティック・イデオロギーの「女性の領域」概念としての家庭性（ドメスティシティ），ヴィクトリア朝的道徳観や宗教観，ジェンダーなどの価値観を背景に女性の文化が生まれ，権利運動が起こったのである。

2.3 詩作と隠遁生活

それでは，ピューリタニズムの色濃いマサチューセッツという土地柄で，アーマストの町の特権階級の家庭に生まれ生涯未婚であり，社会的活動もしなかった理由とは何であったのだろうか。ディキンスン家のなかで，彼女だけがキリスト教へ回心をしなかった。16歳の頃に書いた手紙には，当時盛んであったリバイバル運動に関して，信仰告白に迷いのある心情を友に語っている。その後，寄宿舎生活を送ったマウント・ホリヨーク女子セミナリー（Mount Holyoke Female Seminary, 現Mount Holyoke College）では，教育の一環として定期的に信仰告白が促されたが信仰体験を得られず，翌年には退学している。

2.4 ディキンスンの内省と懐疑

ディキンスンの詩には解釈が難儀なものが多い。一例を挙げると，“I'm ceded – I've stopped being Their's -（Fr353, 1862）”は二度目の信仰告白を拒絶した内容でありながら，実は詩作に一生を捧げる思いを堅信のイメージで表現している[6]。1862年というこの詩の制作年代は，詩人として心を新たにした年であった[7]。ディキンスンはすでに300篇以上も書きためた詩の中の数編を添えて，「私の詩が生きているかどうか教えていただけないでしょうか？」（L-260）と，師と仰いだトーマス・ウェントワース・ヒギンスン（Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911）にこの詩を贈ったのである[8]。しかし，ヒギンスンに認められなかった。韻律が調子はずれであるという指摘や，出版を遅らせるようにという忠告を受けている。ディキンスンはヒギンスンへ，自分の方法を変えるつもりはないという返事を書いた。

内省の世界をみつめ孤独な詩作を続けるディキンスンだが，詩の一部を改ざんされ，匿名のまま無断で雑誌に掲載されることが何度かあった[9]。次の詩は出版への懐疑が表れている。

Publication - is the Auction
Of the Mind of Man-
Poverty - be justifying
For so foul a thing

Possibly - but We - would rather
From Our Garret go
White - unto the White Creator-
Than invest - Our Snow-

Thought belong to Him who gave it
Then - to Him Who bear
It's Corporeal illustration- sell
The Royal Air-

In the Parcel - Be the Merchant
Of the Heavenly Grace-
But reduce no Human Spirit
To Disgrace of Price - (Fr788, 1863)

出版は－人の心の競売／貧困こそ－正当化される／そんな卑しい事には／／でもわたしたちは－雪を投資するより／むしろ，屋根裏部屋から白い－白い創造主へ－／向かっていくほうがいい／／思考は，それをくれた神様にふさわしい／それから－肉体を与えて下さった神様にふさわしい－／神様には－気高い態度を売るべきなのだ／／天の恵みの商人になっても／貨幣の恥辱のために－／人間の魂をおとしめてはいけない

ディキンスンのオーサー性が挫かれ，その結果として出版を避けたことは十分に考えられる。

厳格な父親のもとで育ち，特権階級の身分にあったディキンスンが，文学の道を目指すことにそれほど困難はなかった。だが，制限された空間の中でわき立つ感情の波が詩作へ向かわせることになった。

3. 詩の特異性

3.1 コモン・ミーターの変形と変容

ディキンスンの詩を理解する上で，詩法と構造の特異性が饒舌に語っていることがある。ディキンスンの詩の基盤は讃美歌と聖書であり，一般的な讃美歌の韻律であったコモン・ミーターが基本の詩形である。古川は「[コモン・ミーターは，]英詩の一般詩型（例えば，iambic pentameter）からすれば，必ずしも主流に近いものではない」と述べている[10]。なぜそれを詩の基調としたのかについて，その理由を「ディキンスンの詩の本質に触れる重大な問題」であり，①凝集性，②論理性，③ダッシュの頻度，④柔軟性の４つにあるとする[11]。

3.2 アフォリズムの多用

特に②論理性は，「はっきりとした論理的展開を示す」ことで，多用される「アフォリズム」や「AはBである」という構文によって顕著に示される。次の詩はその一例である。

One and One - are One-
Two - be finished using-
Well enough for schools-
But for minor Choosing-

Life - just - Or Death-
Or the Everlasting-
More - would be too vast
For the Soul's Comprising - (Fr497, 1862)

一たす一は一／二は，もう答えではありません／学校の授業での答えです／でも，小さいほうを選ぶなら／／生か死か－／あるいは永遠か／それ以上だと，魂は大きくなりすぎてしまうでしょう

「AはBである」とする1つの命題を示し，否定の接続詞“but”によって論が展開する。「ディキンスンの『定義』への熱中ぶりは彼女があたかも彼女独自の“Lexicon”を作ろうとしていたのではないかとさえ思わせるものだ」と稲田が言うように，ディキンスンは実に多用している[12]。この点について稲田は，フェミニスト批評家であるSuzanne Juhaszの主張を援用し，ディキンスンが父権社会において積極的な隠遁を自ら選択し，戦略的な女性詩人のパワー，つまり私的空間を得たというJuhaszの主張の根本に理解を示す。

> [アフォリズムは]女性詩人としての彼女の立場と無関係ではない。アフォリズムは女性詩人が常に直面しなければならなかった権威の問題を解決してくれる。‥‥異議，沈黙，自己放棄が彼女の頑固な自己主張であったと同じように，彼女の自己主張の一形態なのだ。(Juhasz 33)

アフォリズムの形式が発言者の言葉を公的なものへと変え，一般化し，女性詩人の性を消してしまうのだ。さらに，Juhaszはディキンスンの詩的言語や語彙，修辞的表現方法等にみられる詩の構造が，この精神の空間と密接な関りがあると主張する。「ディキンスンの詩的語彙には，空間と時間の語である“dimensional”と抽象語，観念語のような“conceptional”な語の二種類があり」(28)，しばしばこの両者の語彙の遭遇によって規定されると結論づける[13]。Juhaszの視点は，ディキンスンの詩の理解において重要な意味をもつと言える。

3.3 詩の重層構造

本節では，Juhaszが主張する「ディキンスンの詩的語彙と精神的な空間」の関連について可視化するため，古川の研究「ディキンスンの詩の重層構造」の概念分類を用いる。古川は，その主要概念を以下のように明示している。

表１ 古川の概念分類 [14]

部類	内容
部類Ⅰ	3 つ以上の相異なる概念が統合されることによって重層性を持つ場合
部類Ⅱ	相反する概念が融合される場合
部類Ⅲ	ひとつの概念に多義性が込められる場合，またはそれが分離・分裂する場合
部類 A	内面探求の視点による場合
部類 B	永遠探求の視点による場合

上記の分類に対応するそれぞれの詩を確認する。まず，「3つ以上の相違なる概念が融合される（部類Ⅰ）」の詩である。

Best Things dwell out of Sight
The Pearl - the Just - Our Thought-

Most shun the Public Air
Legitimate, and Rare-

The Capsule of the Wind
The Capsule of the Mind

Exhibit here, as doth a Burr-
Germ's Germ be where? (Fr1012, 1865)

形式は，カプレット（二行連）で各行がきちんと押韻されている。第一連では「真珠」，「正義」，「思想」の3つの異なる抽象名詞が並列され「最高のもの」をイメージする抽象概念に融合される。「最高のもの」は，「公共の空気を避け」，風や心はカプセルのなかで小さな胞子のように飛んでいる。最終連では細分化の限界レベルの行方を問い，ミクロの世界に目を向けている。これは「内面探求の視

点」（部類A）である。

次に，部類Ⅱ「相反する概念の融合」として，古川の例示する詩には「逆説と対比」（53-92）の構造が含まれる。

By homely gifts and hindered Words
The human heart is told
Of Nothing-
“Nothing” is the force
That renovates the World- (Fr1611, 1883)

“Nothing” と “force” は相反する概念であるが，「“Nothing” は明らかに謙譲の意がこめられた肯定的な意味をもっている」（57）。このように，ディキンスンの詩には，「（微）小なるものが（巨）大なるものと相通ずるという概念」（313）という「逆説的思想」（313）が散見され，重層性をもっていると古川は述べている。

最後に示すのは，部類Ⅲの「ひとつの概念にこめられる多義性の概念」の例である。

As if the Sea should part
And show a further Sea-
And that - a further - and the Three
But a Presumption be-

Of Periods of Seas-
Unvisited of Shores-
Themselves the Verge of Seas to be-
Eternity - is Those - (Fr720, 1863)

「裂ける海」，「その向こうの海」，「そのまた向こうの海」と，“sea” が「１つの言葉からこれほど幾重にも拡大するイメージ」（古川，315）として用いられる。この同心円の広がりを海の周期までイメージし，境界線を越えた海の無限性に永遠を重ねている。部類Ｂの「永遠思考の視点」に相当するものである。ディキンスンの詩の重層構造が，抽象語にみられる曖昧性，多義性によって壮大な詩的ヴィジョンへとつながっていくのである。

19世紀半ばのアメリカが，目まぐるしく政治や経済への価値観が変化するなか，ディキンスンは讃美歌の詩型に自己を規定しつつ，そこから破格することで詩作あるいは生への可能性を見いだそうとした。しかし，基調からの逸脱は敬虔さ，慎ましさという宗教性・道徳性からの破格を意味する。このような両義性は，ディキンスンの思考の傾向とも言えよう。

4. Called backの意味

4.1 出版への抵抗とファシクル

第2章第1節で，ディキンスンの詩の量産時期が南北戦争と重なっていたと述べたが，同時に女性誌の隆盛を極めた時期でもあった。当時の女性作家の詩や小説がヴィクトリア朝的なジェンダー・イデオロギーに対しておおむね従順なものであったことは，バーブラ・ウェルター（Barbara Welter）の調査で既に知られている[15]。家庭空間は国家的・政治的な領域から除外され，ことさら道徳性が強調された。だがその一方で，この時期はアメリカン・ルネサンス活動期あるいはセアラ・ジェセファ・ヘイル（Sarah Josepha Hale, 1788-1879）の女性誌『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』の出版文化の隆盛時期であった[16]。ヘイルはヴィクトリア朝的レトリックによって女性圏を形成し，女性の文化や職業の公的空間をつくることに成功した。

しかし，このような性差の闘争に与することなく，ディキンスンは孤独に詩作を続けた。この点に関して，ベッツイ・アーキラ（Betsy Erkkila）は興味深い指摘をしている。「[ディキンスンの詩作は，]民主化と商業化という，二つの力に対する貴族的な抵抗として特徴づけられる」[17]。ディキンスンは50代後半になると，自作詩の一部をグループ分けし針と糸で縫い付けはじめた。ファシクルと呼ばれ，「これらは出版するための準備だったかもしれないが，これまで拒否してきた態度からは，私的な出版活動をしていた可能性が高い」（20）とアーキラは指摘する。つまり，「ディキンスンは当時の出版を商業的で機械的なもの，市場経済の法則に文学が従うような様相に異議を唱え，前資本主義経済的な原稿の生産と流通の様式を考えていたのではないか」（20），「手製の製本を友人に宛てた手紙と一緒に詩を同封し流通させるという，私的で本質的に貴族的な『出版』の形態に携わっている」（20）と，アーキラはディキンスンの市場経済への抵抗をみるのである。しかし，どのような意図でファシクルを残したのかは，未だに研究者間での意見は分かれている。何らかの意図があるとする見解もあれば，ただの草稿に過ぎずそもそも出版の意思がなかったとする見解もある。ファシクルの解釈は，今後も研究の余地を残している。

4.2 最期のメッセージ

1886年5月15日にディキンスンはこの世を去った。5月に入って2週間の間にいとこのノークロス姉妹へ最期の言葉 “Little Cousins, Called back. Emily.” を送っている（L-1046）。1885年1月の手紙で，当時人気のあったヒュー・コンウェイ（Hugh Conway, 1847-85）の推理小説*Called Back*（1883）を読み，忘れられない物語であると伝えている。（L-962）[18]

墓碑名に “CALLED BACK” の文字が刻まれたのはディキンスンの死後から何年か経ってからであるが，20年間ディキンスンを研究したリチャード・シューアル（Richard Sewall, 1908-2003）は，「絶対的に確かなのは墓に刻まれた2つの日付だけだ」と語っている[19]。つまり，生前に教会へ通うことのなかったディキンスンの辞世の言葉としては，違和感を覚えるということである。

論者は，ここでひとつの仮説を立ててみたい。もしディ

キンスンが，“Called back”という言葉に何らかの意味を込めたとすれば，ファシクルの存在が別の意図を持つことになる。次の詩がその手がかりとなる。

A word made Flesh is seldom
And tremblingly partook
Nor then perhaps reported
But have I not mistook

Each one of us has tasted
With ecstasies of stealth
The very food debated
To our specific strength-

A word that breathes distinctly
Has not the power to die
Cohesive as the Spirit
It may expire if He-

“Made Flesh and dwelt among us”
Could condescension be
Like this consent of Language
This loved Philology (Fr1715, Undated) [20]

言葉が肉になるのはまれで／震えるうちに分け与えられるも／おそらく，味は伝えられない／でも，私の勘違いでなければ／／私たちのそれぞれは，盗品の恍惚をもって／それを味わってきた／私たちの持っている特別な力にとって／争われた食べ物／／はっきりと呼吸する言葉は／神霊のように凝集して／けっして死なない／言葉は息絶えるかもしれない　もし神が／／「言（キリスト）が肉（人）となって，私たちの間に住まわれた」なら／謙遜とは　この神の言葉の承認／この神の言葉への愛

“A word made Flesh is seldom”は，ヨハネによる福音書の冒頭“In the beginning the Word already existed. The Word was with God, and the Word was God.”（ヨハネ1：1）〈初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。〉を念頭においた詩行だ。哲学では「言」はロゴスの意とされ，「永遠の理性」や「世界の原理」として捉えられていた。つまり，ロゴスとは神の言葉である。ディキンスンは，言葉に永遠性をもとめていた。しかし，自分の住む人間世界は神とは違う。それゆえ，言葉は息絶えるかもしれない，と相反する思いをぶつける。神の世界をあちら側に払いのけ，有限の生を強く意識する。“condescension”は小さな存在である人間のことを指し，そのような詩人の言葉もまた真をもとめる限りにおいて神と同じに輝くというのである。これは，ディキンスンの詩人としての矜持である。

4.3「不滅」，言葉の両義性

ディキンスンの永遠思考の概念は不滅を意味するものであり，不滅の魂には「疑念，信仰，否定，皮肉，可能性」などがこめられ，このような多義性は肉体の生死と結び付けられている。そうであれば，ディキンスンの“Called back”が，「（この世に）呼び戻されて」と「（あの世に）召されます」の両義性の意味をもった言葉であると解釈できる。ゆえに，ディキンスンは「この世の不滅」としてファシクルを残したと言えるのである。言葉の両義性は，詩的言語に思考の広がりを与える詩人にとって重要な要素である。

5. おわりに

自己とは何か？この問いに，ディキンスンは多方面から思考し言語化しようとした。聖書や讃美歌が多く引用されたのは，神の前に立つ一個の罪人であるわが身を意識するからである。そして，言葉に崇高な心を求めたのである。

A word is dead, when it is said
Some say –
I say it just begins to live
That day (Fr278, 1862)

言葉は発せられたとき息絶える，と人は言う。
私は言う。まさにその時，言葉は生き始めると。

肉体を失くした人の言葉は，地上に残された者たちによって思考され，意味づけられるのである。言葉は再び光を放ちよみがえる。聖書として生き続ける，私たちの心のままのように。

謝辞

指導教員である宮本陽一郎教授には，研究の着想から，論文構成や展開，論文執筆まで多くのご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。最後に，宮本ゼミのみなさまには様々な視点から質問やコメントを頂きました。お礼申し上げます。

注

[1] ジョンスン版は作品総数1775篇，フランクリン版は作品総数1789篇。
[2] 詩の引用はすべてフランクリン版から，丸括弧内は（番号，制作年）と記す。
[3] 詳しくは，Thomas H. Johnson, ed., *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. by Emily Dickinson (New York: Little, Brown and Company, 1976), viii. を参照。
[4] アレン・テイト「エミリー・ディキンスン論」，『ディキンスン詩集　海外詩文庫』新倉俊一訳（東京，思潮

社，1993年），116-35頁。

[5] アメリカ文芸復興期の主要な作品に女性たちが登場する作品の少なさから，その欠落を指摘したベイムは，女性作家の研究分野を確立させた。

[6] 大西直樹『エミリ・ディキンスン　アメジストの記憶』（東京，彩流社，2017年），48頁。

[7] 大西，48頁。1862年は，ディキンスンが自作詩へのアドバイスを第三者にはじめて求めた年。

[8] 山川瑞明・武田雅子編訳『エミリ・ディキンスンの手紙』（東京，弓書房，1984年），126頁。ヒギンスンは，当時の名高い批評家であり，ディキンスンとの書簡のやりとりが生涯続いた。

[9] ディキンスンの生前の出版物は1通の手紙と10作品の詩であるが，すべて匿名で出典も明記されていない。

[10] 古川隆夫『エミリ・ディキンスンの詩法の研究』（東京，研究社出版，1992年），250頁。

[11] 古川，250-51頁。

[12] 稲田勝彦「エミリ・ディキンスン研究 －天国獲得の戦略」（『広島大学博士論文』，1991年），67頁。2023年11月確認　＜https://doi.org/10.11501/3055165＞

[13] 稲田，97-98頁。語彙の遭遇とは，抽象と具象，観念と事物，精神と自然の世界の間のアナロジーのメタファーでおこなわれる。

[14] 古川，311-14頁。

[15] このようなイデオロギーを要約している著名な論文は，Barbara Welter. “The Cult of True Womanhood: 1820-1860.” *American Quarterly*, vol. 18, no. 2(1966): 151–74.

[16]『ゴーディーズ』（1837-77）は，南北戦争前夜で定期購読者は15万人，1860年の発行部数は『ダイヤル』（*The Dial*）の500倍であった。パトリシア・オッカー『女性編集者の時代　アメリカ女性誌の原点』鈴木淑美訳（東京，青土社，2003年），30頁。

[17] Betsy Erkkila, “Emily Dickinson and Class,” *American Literary History* 4(1992): 1-27.

[18] Hugh Conwayはペンネームであり，本名はフレデリック・ジョン・ファーガス（Fredric John Fargus）でイギリスの作家である。*Called Back*は350万部売り上げた人気の推理小説である。

[19] Nardi Reeder Campion. “Emily Dickinson Still Lives in Amherst.” *The New York Times*, June 11, 1972:6. Web.15 Aug. 2023 <https://www.nytimes.com/1972/06/11/archives/emily-dickinson-still-lives-in-amherst-called-back-emily-lives.html>.

[20] “The Word became flesh and made his dwelling among us.”〈言葉は肉となって，わたしたちの間に宿られた〉（ヨハネ伝1:14）

参考文献

Baym, Nina. “At Home with History: History Books and Women’s Sphere Before the Civil War.” *American Antiquarian Society*, 1880 – 1908, vol. 101, part 2(1991), American Antiquarian Society (1992): 275-95.

Campion, Nardi Reeder. “Emily Dickinson Still Lives in Amherst.” *The New York Times*, June 11, 1972: 6.

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson: Reading Edition*. Ed. R. W. Franklin. Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1999.

---. *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Ed. Thomas H. Johnson. New York: Little, Brown, 1976.

“Dickinson/Abiah Root (Strong) Correspondence: 16 May 1848 (Letter 23).” *Dickinson Electronic Archives*. 13 July 2023 <http://archive.emilydickinson.org/correspondence/aroot/l23.html>.

“Emily Dickinson and Death.” *Emily Dickinson Museum*. 14 Aug. 2023 <https://www.emilydickinsonmuseum.org/emily-dickinson/biography/special-topics/emily-dickinson-and-death/>.

Erkkila, Betsy. “Emily Dickinson and Class.” *American Literary History* 4(1992): 1-27.

Juhasz, Suzanne. *The Undiscovered Continent: Emily Dickinson and the Space of the Mind*. Bloomington: Indiana UP, 1983.

Welter, Barbara. “The Cult of True Womanhood: 1820-1860.” *American Quarterly*, vol. 18, no. 2(1966): 151–74.

稲田勝彦「エミリ・ディキンスン研究 －天国獲得の戦略」『広島大学博士論文』（1991年）

ジェイン・D．エバウィン編『エミリ・ディキンスン事典』鵜野ひろ子訳　東京，雄松堂出版，2007年。

大西直樹『エミリ・ディキンスン　アメジストの記憶』東京，彩流社，2017年。

パトリシア・オッカー『女性編集者の時代　アメリカ女性誌の原点』鈴木淑美訳　東京，青土社，2003年。

アレン・テイト「エミリー・ディキンスン論」『ディキンスン詩集　海外詩文庫』新倉俊一訳　東京，思潮社，1993年。

古川隆夫『ディキンスンの詩法の研究』東京，研究社出版，1992年。

ニーナ・ベイム「第2章　アメリカ文学における女性の肖像　一七九〇－一八七〇」『アメリカ文学のなかの女性　ファミニスト的視点によるもう一つの米文学史』M・スプリンガー編　小林富久子訳　東京，成文堂，1985年，1-81頁。

山川瑞明・武田雅子編訳『エミリ・ディキンスンの手紙』東京，弓書房，1984年。